惨憺たる残念転生者の残念ライフ――その世界《仮想世界》

番人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
惨憺たる残念転生者の残念ライフ――その世界《仮想世界》

【Ｎコード】
Ｎ５０２９ＢＡ

【作者名】
番人

【あらすじ】
桐谷白夜、彼は自殺者である。

桐谷白夜、彼は転生者である。

悔やんで後悔して逝く世界は――そう、仮想だった。

仮想である世界にも、現実はあった。

その世界を見つめて、彼は再び人生を歩み出す。

一話　罪の重さ（前書き）

どうも初めまして、番人と申します。

ま、処女作ですが気長に見てやって下さい。

一話　罪の重さ

少年は、そこにいた。
空間。人がまるで波のように蠢くのを、ただ見ていた。

少年は、そこにいた。
瞬間。その刹那をただ見ているように、見つめていた。

何をするわけでもなく。何をしたいわけでもなく。

少年はただそこにいるだけ。

たまに知らない誰かと肩がぶつかることだけが、存在感を表す。

そこ。

この場所を把握するには、とてもとても曖昧な表現。

その表現力は、生きるために必要であり、必需だ。

その道が分からなければ、迷う。
その場所を知らなければ、戸惑う。

しかし少年はそこを知っていて、それを確認していない。
それは死への肯定。
つまり、『生をやめた』

なんだよ、なんだよこれ。
こんなの望んでない、見たくない。

――悲痛な、現実の否定。

今までの軌跡。存在。人生の否定。

少年の名前は、桐谷白夜（きりたにびゃくや）

生まれは北海道。2月8日の夜、その日は全ての物が真っ白に見えたことから、この名前がついた――らしい。

幼稚園では、これといって秀でていた物はなく、幼稚園児らしく幼稚園児と仲良く普通に遊んでいた。

小学校では、少しだけ皆より背が高く、皆に強そうだと思われ、自分も強いと思い込み結構悪さをした。

中学校では、そんなことがバカらしいと分かり、当然の友達を持ち、吹奏楽部と言う部活に入り、勉強もゲームも部活も見事両立し、結構な成績をキープした。

高校では、吹奏楽部に飽き、サッカー部とバスケット部に入部。そのお陰で勉強がおろそかになった。

高校二年生。部活に飽きて、両方やめバイトに入った。自分のお金をかせぐことの満足感を覚えた。

それが、今だ。

この桐谷十夜の軌跡だ。

ごく、ありふれた当然の人生。
生まれて育って勉強して過ちを犯して気付いて笑ってバイトして。
人間。普通の人間なら当然のような人生だろう。
が。
この少年には違って見えた。
突然視界が色褪せたのだ。
なんだよこれ、おい、違うよ。
こんなの、見たくなかった。
今までを振り返って、思ってしまったのだ。
何で俺はこんなことをしている――？
流れる川の水のように、ただ流されてここまで来た。
それを振り返って、深く、考え込んだ。
少年の足は勝手に動き出す。
この世の真理を見るために。
――俺の存在価値は、なんだ？
――俺のいる理由はなんだ？

――俺って、なんだ？

考え出したら止まらない。
それはまるで負の連鎖。
そう、自分の存在価値が分からない。
終わりの見えた映画のように。嵌め方を全て知っているパズル見たいに、どうでもよくなった。

それは皆同じなのに。
それは等しく皆が皆なのに。
それに気付かないで、気付こうとしないで。

ガチャリ……。

いつの間にか目の前にあった所々に錆のついた重々しい扉を開く。
流れ込んで来たのは、風。
見上げれば、先程より近くなった空。
青い、蒼い、碧い。
――屋上だ。
それだけは、認識する。
ただ、歩いてみた。
そのあまり広くない空間をいつまでも歩けるわけがなく、落下防止

の鉄格子が目の前にそびえ立った。
しかし、少年は止まらない。
それを、飛び越える。
改めて、自由な空間。
広く、先程のように鉄格子等ない、縛るものなど何もない空。

「嗚呼……」

感嘆。だろうか？そんな声が漏れた。
次には、目尻に暖かい感覚。

涙だ。

なぜその無色の液体が溢れたのだろうか？
この世界に対する憤慨？憤り？怒り？悲しみ？

ただ、少年は空を見上げた。
手を、伸ばした。
届かない。
分かっている。
届かないのなんて、知っている。
だから、手を下ろした。
次は、下をのぞく。

小さい虫のように、わらわらと動き回る人間。
小さい。とても小さくて矮小。
そしてその言葉は同時に自分に向けられたものでもある。

この世のなかはこの小さくて矮小な俺らが集まって構成されてる。

集まって、集まって。まるでネットワークのように。

だからさ。

「たかだか俺が死んだって、なんも変わらないよな……？」

誰に問いかけているのか？

それはきっと自分でも分かって無いだろう。

空を見上げ、天を仰いだ。

身が、宙を舞った。

フヒュッ！！

と、耳鳴りのような音が鼓膜を突き、風圧で目が開けない。

「う、うわぁぁぁあがぁぁだ！？」

変でしゃがれた声が喉から発せられる。

怖い怖い怖い怖い怖いコワイコワイコワイコワイ。

今更、感情が働き始める。

眼前には死の香り。

最後に、今までの人生がパッと頭のなかでフラッシュバックを起こし。

ドゥン！！！！

首から落下し、数秒間痙攣したのち――。

――少年はそのまま息を引き取った。

真っ暗で、真っ黒な空間。

あの少年はそこにこそいた。

まだ、眠っている。

まだ、死んでいる。

「……ねぇ」

女の声。

「……ねぇ」

悲しみの成分を含んだ声。

「どうして、どうしてそんな事をしたの？」

撫でるように、包むように優しく、悲しい声。

その瞬間、少年は起きた。

「あ、あ、あぁ……ああ、いあ……あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？？」

狂ってる。いや、正気を失っている。

無理もない。人間はか弱い生き物だ。

いくら自分から死んでも簡単に受容出来るような事ではない。

結構な数の人間は、こうなる。

しかしあの声の主が、早口で何かを唱えた瞬間、その狂った叫びはピタリとやんだ。

十夜ｓｉｄｅ

「え……？俺は……何を……？」

目と鼻から水を垂らし、ぽけっとしながらどこかに問いかける。

答えは後ろから返ってきた。

「……死んだわ。首から落ちたから即死よ。それに腕と足の健がズタズタになってた……死因は飛び降り、自殺よ。覚えてる？」

俺はそこでようやく、自分の顔がどうなっているかを理解し息をついた。

「あ、あぁ……そうだ、そうだった。死んだんだ……死んだんだよ、俺は……じゃあ――ここはどこなんだ？」

そう、問題はそれだ。

「……何処でもないわよ。あなたたちの世界の様に広さの制限もないし場所なんて言う概念が存在しないもの」

理解できない。出来るわけがない。なんなんだ？じゃあなんなんだよ。お前は誰だ？神とでも言うつもりか？

「そんな高度な存在じゃない」

俺がその言葉を喉から発する前に言われる。

「私は噛み砕いて言うとそれの……いや、何でもないわ。あなたの関係する話ではないもの」

「……ま、まぁそれについてはなにも言わない。知らないしな」

――って、ちょっと待てよ俺。

「ちょっと待ってくれ。俺が死んだのは分かるんだ。分かるんだよ。そして君が出てきた。それが謎だ。本当に君にはそんな……力みたいなものを持っていたり、するのか？」

これだろ？何でそんな簡単に信じてんだよ。おかしいだろ。

「うーん。信じてもらう方法的には……そうね。ちょっと衝撃が来るけど我慢して」

その言葉の後、刹那の好きもなく無数の何かが飛来してきた。

ドッドッドッド！！！

胸のなかに、全てが収まるような形で、それらは動きを止めた。

それを、見てみると。

「う、うわぁぁあああ！？」

刃物だった。

身体中に、至るところに、見たくないほどに深々と。

「痛みは、ある？」

「うわぁぁあああ……って痛くない」

「とりあえずこれが死んでる証拠で――」

次に、彼女は早口で何かを唱えた。

するといつの間にか、俺の体に突き刺さっていた、刃やその後がきれいさっぱり無くなっていた。

これは、もう……信じるしかないだろ。

その反面、少し違和感を感じる。

それはこの異常な世界に、世界かも分からない『ここ』に対して何の不安も抱いていない自分と、死んだことに関して何の拒絶も無いことだ。

「……ああ、うん。分かった。で、なんか用があるん……だよな？」

俺はその疑念を一度頭を振って無理矢理消し去り、彼女に向き直った。

「そう、貴方に会いに来たのは……そっちの世界の言葉を借りていうとそうね、神からの、質問よ」

「質問？」

「そう、それにしても珍しい……たかが人間にそんなことするなんて……」

たかが人間に。この言葉がこの世界における人間の価値の低さを物語る。

可哀想だな、他人事だが。

「じゃあ、早速『貴様は何故、死を選んだ？』ですって」

悩む。とてもとても、悩む。

何故死んだ？おい、俺よ、何故そんなことを選んだんだ？もっと道はあったじゃねぇか？
おい、俺よ――。

「……分からない」

「はっ？」

「……いや、本当に分からない。何でだ？何でだよ――」

周りから見たら、大変気色の悪い光景だろう。何せ知らない高校生が一人で自問自答してるわけだ。まぁ、自答はまだしてないが。
てかおい、そんな残念な目でこっち皆。昔のトラウマが甦るだろ。

「ふふ……ははは……！」

暗闇の奥から、何かが来た。

「――――ッ！？」

隣の少女が、身をこわばらせる。

「オイ、貴様。人間よ。貴様今なんといった？分からない。と言ったか？オイ、人間よ。貴様は中々面白い。人間の癖に、だ」

まるで一人語りのよう、俺に言葉を喋る隙を与えてくれない。

「オイ、人間よ――蘇りたくは、無いか？」

「えっ――！？」

突然の一言。

甦る？それは生き返るととって良いのか？

それは、また、人生をやり直すと取って良いのか？

「だめよっ！！それは――っ！！」

「五月蝿い。一匹位変わらないだろう

『　』。それとも……我の邪魔をするつもりか？」

聞き取れない。まるで何かのコードを口から発しているかのような感覚に捕らわれた。

「くっ……！好きにしなさいっ……」

なんか軽く負け犬オーラを発したまま彼女の姿は闇に溶け込むようにして消えた。

「ふん……。そしてだ、転生させるに当たって条件がある」

「……条件……だと？」

それで聞き返すと、浅黒い男の口元が笑みで歪んだ。

「あぁ、条件はただひとつ。――我を楽しませろ」

その言葉に、衝撃が体を襲う。

「楽しませろ……ふざけるなっ！転生の為に身体を売れと！？」

「ふざけるなはこっちだ！そういう意味ではないっ！もっと純粋にだな……」

「純粋に……ピュアプレイ……？」

「死ねよお前！あ、もう死んでるか」

「キャラ変わりすぎだろ……お前作ってるだろそれ」

「……我はそんなことしない」

あ、ばっくれやがった。

「んんっ！とにかくだ。ただ単純にだ、転生した世界でお前の好きなようにやれ。そして我がその状態を楽しめれば……続行だ」

「お前がつまらなく感じたら……」

「お前をその世界から消しその世界も……初期化して全てを元通りに戻すだけだ」

「なにそれ怖い」

「というか俺に利益あるのか？」

「生き返れるではないか」

いや、おかしい。

「まてよ、俺は死ぬために飛び降りたんだぜ。何でまた生き返らなくてはいけない？」

「なら何故この話をここまで聞く必要がある？」

あっ――――。

そこで気づいた。そう、自分がビックリするぐらいこの話にがっついていたことに。

「死を望んだ者が何故この話を聞く？死を望んだ者が何故そこまでこの話を理解しようとする？それはな、貴様がまだ、また生きたがっている証拠だよ」

「……だな」

否定なんて、出来なかった。

自分がどれだけのことをしたか、自分がどれだけの過ちを犯したのか。

「まぁ生やら死やらの生物特有の概念に捕らわれている生物が悪い。で、だ。結局どうなのだ？やるのか？やらんのか？人間など腐るほどいる。そのなかでも貴様を選んでやったのだ。決めるのも貴様、止めるのも貴様だ」

元々そこに存在していた、本来の静寂がまた生まれる。
死に対して拒絶は無い。
生に対しても、拒絶は無い。
でも、だ。
俺は思ってしまった。
死を受け入れるのなら、俺は生に受け入れて貰いたい。
光もない暗い空間のなか、決めた。
「やる……よ。俺。やりたい。もう一度だけ、チャンスが欲しい。こんな馬鹿なことやらかした俺だけど……望んでなくて死んでしまった皆にも悪いけど、俺、もう一回だけ、もう一度だけ人生をやりたい！」
それを浅黒い男が聞くと、元々つり上がっていた口元が、更に喜につり上がった。
「良かろう。では行ってこい、
我の傀儡。我の玩具。我の暇潰しよ。その骨身をもってして、我の興となるがいい！」
その言葉の後に、段々と、意識が消えかかってくる……。
「最後に言っておくけど……さ」

意識が……遠退いていく。

「最後のその言葉……準備してたろ……」

意識がなくなるその瞬間、浅黒い男の顔が羞恥に染まったのは見ていて楽しかった。

……。

……。

……。

???side

「何でこんなことをしたの？」

今まで存在を消していた彼女は、ここにきて体に様々な装飾品を着けた彼――『　』に敵視を向けた。

「ふん、やはりまだ存在してたか

『　』よ……。何故？だと。ハッ！面白いことを言うな。話を聞いていたのなら分かるだろう？暇潰しだ。最近、中々満たされる様な出来事がなくてな」

「貴方は『　』よ。満たされる筈がないじゃない」

そうだな、と彼は静かに肯定した。しかし彼は、でもな、とも否定の意を取った。

「やはり、人間とは面白い。たかが人間ごときが『あらぬ領域』の

話さえ作ってしまうのだ。強欲がゆえにな」

「火が無くとも火を力として扱える世界。古代の世の様に巨大な生物と争う物語。魔法と異能。そんなあり得ない物が存在する物語。あり得ない――だからこそ、そこに存在する物語。ふふ……フハハ。だから人間は面白い。取れぬものを望み、願い、創ろうとする。そんな強欲があったからこそ、我も生まれた」

「貴方が居たからこそ、『人間』が生まれたとも言えるよ」

「ふん、考えるだけ無駄だな。今の世でいう鶏と卵だ」

「……それもそう。私もね。けどよかったの？さっき彼の逝った世界を覗いたけど、案外普通なのね」

「いいや、それでいいのさ。だからこそ面白いのだ。貴様は分からんだろうがな。しかし、簡単にしなれては困る。――一つだけ力は与えてやった。後は知らん」

彼はそれをいってまた口元を笑みで歪めた。

「知らないって……その力は何？」

「だから知らんと言っておる。その力を見ていないからな。どんな効果があるかはやつ次第だ」

「そんな簡単に……？」

彼女は込み上げてくるものを押さえずに、ため息を吐く。

「ふん、用はすんだ。我も消えるか。さて、奴がどうなるか。じっくりと待たせてもらおう」

一人の……いや、一つのなにかは暗闇へと足を進め、右か左か上か下かも分からないまま歩み、消えていった。

その場に残った彼女も、何もないこの空間を一瞥して、消えた。

一話　罪の重さ（後書き）

と、言うことで始まりましたはいテンプレです。

死に方はテンプレか分かりませんがきっとテンプレでしょうね。

では次からＳＡＯの世界に入ります。

第二話　転生っていうか生まれ変わりっぽいね。（前書き）

ども、二話目です。

思ったけど一話目関係ねぇ……。

第二話　転生っていうか生まれ変わりっぽいね。

おはよう。

転生した、桐谷白夜……おっと、ここでは冴木白夜と言う。

名前が同じなのって神の計らいなのか？

でもま、良いか。そんなことより結構重大な現実が目の前にある。

からだは肉付きの良いぷにぷにに。

首には力が入らずガクンガクン。

口には歯がなくて舌はまともに廻らない。

「あーうー」

……ご覧の通りでございます。

まぁ大体ご察し頂けたかな？

赤ちゃんに戻ったぁぁぁぁ！？

……ゴホン、取り乱した。

とにかくだ。

俺は転生した。

そしていきなり目の前が明るくなって見てみるとそこには一人の女の人の姿。

それだけははっきりと目にとらえられた。

その後すぐに男の人が慌てて入ってきた。

眼鏡をかけて髪型はオールバック。一見どこにでもいそうだけど、その人からはなにか勝ち組オーラが感じられた。

そして次の瞬間、俺はいきなりといって良いほどの眠気が体と脳を苛み、それにあっさりと負け意識はブラックアウトした。

次に目覚めたのは、慌ただしい部屋だった。

そこにいたのは険しい表情をした男の人。

次に見たのは険しい表情をした女の人。

どちらとも自分の最初に見たあの二人とは違ったし、今回は二人ではなく何人も人がいた。

俺は前世の記憶を必死に掘り起こし、見付けた。

――集中治療室。

俺が中二の時車に跳ねられ、その時全く同じ状況だったのを覚えている。

あ、これは俺がなにか危うい状況なんだなと他人事のように悟る。
だってあいつが――あの男がここで俺を死なせる奴じゃ無いなんて分かってるさ。
ただここでまた、意識が遠退くが感じられた。
おいおい、赤子に麻酔はダメって聞いたことあるぜ？なんてことを考えながら俺は再び人生を闇に身を委ねた。

――――ＳＡＯ――――

サァ……。
窓から木の葉と木の葉が擦れ合い、涼やかな音を奏でるのが聞こえてくる。
俺は目の前のディスプレイから一度目を放しそちらに目を向けた。
巨大な木の葉から漏れる木漏れ日を少し苛立たしく、少し心地よく見つめ、そしてまたディスプレイに目をおとした。
――――どうも、転生者こと冴木白夜だ。
あれから、１５年立った。いや、キングクリムゾンし過ぎって言われても……いいの？聞く？俺の何事もなかったこの１５年間。

何事もなかった。

事故もいざこざも喧嘩も。

本当になんにもなかったんだよ。

なのにあの野郎は全くもって俺を殺したり、消したりさえしない。

奴はあの時言ったのだ。

『我が面白くなく感じたらその時その世界から貴様を消し、その世界さえも同時に消すぞ？』

と。結構省略したがこんな感じだったはずだ。

なのに奴はしないってことは可能性が何個かある。

ひとつ目は、その『何かが』来るのを準備期間として待っているのか。

二つ目はこれはもう始まっているのであり、彼はこのほのぼの系当たり前ストーリーを楽しんでいるのか。――これなら良いのに。

一生楽しめるぜ？ほのぼの系当たり前ストーリー。

両親はいい人だし可愛い妹も居るし。ま、可愛いっていっても一個下なんだけどな。

ま、とにかく俺はこの状況を大いに満足をしている。

俺の両親――冴木母、父は言ってしまえば金持ちであり家は普通に

裕福だった。

なに不自由なく、皆仲良く。

本当に、ご近所からは絵にかいたような仲良し家族とまで言われている。

豊かで仲良しで明るい。――だからだろうか？

俺はその家族からいつも、一歩引いてしまう。

――一度死んだ人間が、ここにいて良いのか？

――俺は、仲良くする権利があるのだろうか？

――俺は、俺は――――。

コンコン。

軽い木を叩く音。

その音に一瞬ビクッとなって、「どうぞ」と一言いう。

がちゃりとドアノブが捻られる音が聞こえ中から現れたのは――妹の、零（れい）だった。

「あ、お兄ちゃん今大丈夫？」

ひょこっとドアから体だけ出すような形でこの問いかけをしてくるときは基本――お願いがある時だ。

俺はもう妹については知っている為にため息をつきながら聞き返す。

「んで、何をお願いしたいんだ？」

それを聞くと妹はぷくっと頬を膨らました。

「あ、酷ーい。そうやって決めつけたら……」

「ん、じゃあ何もないんだな？」

そう言って椅子から立ち、ドアを閉めようとする。

「あ、ごめんごめん！あります！あるから閉めないでぇ！！」

「そうなのか？ははは。じゃあ宜しい」

笑いをこらえても、思わず笑ってしまう。

「もうっ。……でね？」

零は部屋に入り俺のベットに腰掛け改めて話を開始した。

零の話では最近自分欲しいものがある、と言うことだ。

それの名前はソードアート・オンライン

まぁテレビでもかなり取り上げられていたから日本――いや、世界中で今話題のはずだ。

それはなにかというと――――ゲーム。

しかし、今までのゲームとは次元が違った。

今までのゲームと言えばまぁ、液晶画面に向かって、言ってしまえば第3者視点で物事を進めていただろう。

だが《ナーウギア》を使うゲームは違う。

ここで少し、ナーウギアについて触れておこう。

この半年前に発売されたゲーム機は頭からすっぽり覆うようなヘルメット型になっておりその機械は液晶画面に向かってゲームをする為の物ではない。

仮想空間（ＶＲ）への接続を可能とした、次世代型マシンといっても過言ではないだろう。

だからこのゲームは『主人公の視点でゲーム』をやるのだ。

それは画面が主人公視点になっているなどの事ではなくて、完全にゲームのなかに入る為の機械であり、まさしくそれは完璧なまでに完全な現実との隔離だった。

しかし、この妹がここまで熱狂的に物を欲しがるのは凄い。

そして俺はこの妹の様子を見て――あることを思い出した。

それは友達の一言。

『そー言えばさ、ビャク。新しくソードアート・オンラインって出るだろ？あれのテスターを今募集してんだって。なぁお前も募集して見れば？――確か締め切りは――』

「……８月２４日」

「……えっ？どうしたの？お兄ちゃん」

「なぁ零。いま、何日だ？」

「えっと……８月２３日だよ？」

もう凄い早さで参加した。

「うっわぁ～お兄ちゃんよく覚えてたね～。興味あること以外ほとんど記憶力なんてないのに」

「一言余計だけどまぁ確かに。もっと誉めてくれて良いぞ？――まぁ当たるかどうか分からんけどな～。――ッ！ゲホッゴホッ！」

「あっ！お、お兄ちゃん無茶しないで！からだ弱いんだから、安静にしてよ……大丈夫？」

ああ。と短く返事をする。

そうなのである。俺は産まれたときからからだが弱くして産まれてしまった。

ま、そのせいで昔からあまり外で遊ぶことはできずに、していたことは――オンラインゲームだ。けっこう残念だよね。

まぁ、身体が弱かったお陰でインドア派にジョブチェンジしたわけでもあるが。

ともあれこれで一応妹の望みは叶えてやった。

妹は最後に嬉しそうににんまりと笑い、ありがとうと笑いながらそう言った。

そして7日後、『当たってしまった』

――俺だけ。

俺は最初妹に渡そうと思ったが何故か妹はそれを拒否して「大丈夫だよ、これでなくなったわけじゃないんだから、ほら、せっかく当たったんだからやってね？」なんていって去ってしまった。

まぁ当てたことには当てたんだからと思ってやったらかなりはまった。

ナーウギアでは今まで殆んどがパズルゲームとか教育系ゲームとか。どうでもよいものばかりだったがこれはもう心が踊る。

俺はソードアート・オンラインのテスターである二ヶ月間をかなりのゲーム中毒者としてすごし、そしてテスターになったことによって与えられる優勢購入権で即買いして妹と一緒にやると言うプランまで建てた。

俺の夢のようだった二ヶ月間はすぐに過ぎ去りそして明日ようやく、ソードアート・オンラインが発売される訳である。

――――そうして二〇二二年十一月六日、始まった。

後に『デスゲーム』と呼ばれることになる、悪夢の現実（ゲーム）が。

第二話　転生っていうか生まれ変わりっぽいね。（後書き）

早く本編に入りたいいいいい。

と、ゆーことで誤字脱字感想宜しくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5029ba/

惨憺たる残念転生者の残念ライフ――その世界《仮想世界》

2012年1月14日12時51分発行